

野山の不思議 ⑩

托卵 驚嘆すべき進化の妙

(この項は「ふれあい広場」7月号掲載分を転載し、その際加筆しています)

今年5月9日、二上山で「トッキョキョカキョク(特許許可局)」と聞こえるホトトギスの声を聞きました。「ああ、今年初の音(はつね)だ」と耳をすませた途端、ウグイスの警戒音声(「谷渡り」と呼ばれる鳴き方)がけたたましく響きわたりました。ウグイスにとってホトトギスは「天敵」とも言うべき存在なのです。

ホトトギスはウグイスの巣に卵を産みこんで、子育てを任せてしまう(托卵)鳥なのです。しかも産みこまれた卵は仮親のウグイスの卵より1~2日早く孵(かえ)り、同じ巢内のウグイスの卵をすべて外に放り出して、仮親が運んでくる餌を独り占めして大きくなるのです。ウグイスにとっては「骨折り損のくたびれもうけ」どころの話ではありません。勿論ウグイスも黙っておらず、ホトトギスが巣に近づいてくると激しく啼きたて、攻撃し撃退するので、



ウグイスの巣(5月初旬金剛山で)

二上山での両者の鳴き合いはこの托卵をめぐる攻防戦の雄叫びだったのでしょう。

他種の鳥に托卵する鳥は日本ではカッコウ科の4種(ホトトギス、カッコウ、ツツドリ、ジュウイチ)で、いずれも4~5月頃南方より日本に来て、托卵し夏を過ごして又南方に帰る渡り鳥です。ウグイスなど仮親に育てられた雛たちも成長すると南方に渡ってしまいます。

この4種の鳴き声はそれぞれ特徴があり、古代から詩歌に詠まれるなど親しまれてきました。奈良の山では5月~夏にこれらの鳴き声を聴くことができます。

ずるいと見るか、哀れと考えるか

生物にとって種の保存・繁栄は最も大切な課題です。鳥にとっても子育ては造巢、交尾、産卵、育雛、巣立ちと大変なエネルギーを要する大仕事です。天敵から卵や雛を守るために命がけのたたかいもします。この大仕事を他の鳥に任せ、あろうことか仮親の子を全滅させる托卵鳥に対して「ずるい、ひどい」との見方が多いのですが、一方で「自分の子を自ら育てられない運命」を哀れと考えた日本人も少なくなかったようです。特に婚家に子を置いて離縁された女性の悲哀になぞらえて、そう考えた向きもあるようです。カッコウを呼子鳥と呼んだり、ジュウイチに「慈悲心鳥」の別名をつけたのは「哀れ」派の考え方からでしょう。

最近の研究で「カッコウなどは体温が不安定で卵を温めるには不適」との説が出てくると「哀れ」との見方が増えるのではないのでしょうか。

しかし、いずれの見方も人間の勝手な考えで、鳥たちは子孫を残すために必死に生き、摸索する中で、「托卵」という方法に行き着いたのでしょう。進化の妙に感嘆するばかりです。

今も続く「托卵」の進化 注目される日本での研究

カッコウは従来、ホホジロ、オオヨシキリ、モズなどに托卵してきましたが、最近カラス科のオナガに托卵するようになったのです。1970年代からとされています。

オナガは低山低地に住み、カッコウは高原性でしたが、近年両種とも生息地域を広げて、分布域が重なるようになったこと、カッコウの托卵に対するホホジロなどの防御力（親鳥の接近防止、卵の識別、托卵された巣の放棄など）向上による托卵成功率の低下から、新しい托卵相手としてオナガが選ばれたのでしょう。

オナガの巣に産みこまれるカッコウ卵の様子はホホジロ卵のそれに似ているのですが、最近ではオナガも卵を識別してカッコウ卵を捨てるようになり、托卵成功率が落ちてきたそうです。そこで注目されているのがオナガの巣に産みつけられるカッコウ卵の様子がオナガ卵のそれに似てくるかどうかです。

もしそのようになれば、私たちは「進化を目の当たりにする」ことになり、それはすごい事で、世界の研究者が注目しています。日本の研究者たちの続報をワクワクしながら待つことにしましょう。

7月二上山に咲く花



オカトラノオ (サクラソウ科)



ママコナ (ゴマノハグサ科)



ノギラン (ユリ科ノギラン属)